

平 安

嘉応元年 1169 : 尾道村が備後大田荘の倉敷地となり、尾道浦が公認の港となる

鎌 倉

文永7年 1270 : 尾道浦の津料(入港料)を徴収しない事に決定

延慶3年 1310 : 生口水軍、沼田水軍の支配下(瀬戸田)

室 町

応永2年 1395 : 足利義満、大田荘内桑原6ヶ郷地頭職及び尾道倉敷を高野山西塔に寄進

応永9年 1402 : 因島・能島・来島に拠点を置く村上水軍の勢力伸張

応永27年 1420 : 朝鮮通信使船が往復共に尾道へ寄港

応永29年 1422 : 生口船、河上・兵庫両関の関税免除(瀬戸田)

応永30年 1423 : 幕府、兵庫・津両関奉行に生口船過書の召返しを告げ、瀬戸田などの多くの商船より関役を徴収させる

永享11年 1439 : 尾道船籍の船が大田荘守護請年貢米を堺へ送る

嘉吉元年 1441 : この頃の尾道船籍の船、土堂14隻、堂崎6隻、御所崎15隻、その他18隻、他国入船、三原、田島、備前、児島、牛窓、備中連島、摂津、兵庫等

嘉吉3年 1443 : 犬の島おおいとの船が大田庄の年貢米を尾道から輸送

文安2年 1445 : この頃、瀬戸田・尾道などの多くの商船が兵庫港を通過

宝徳3年 1451 : 対明貿易船団(10艘編成)が尾道で輸出物資を積み込む

: 允澎等を正使とする遣外船が尾道寄港

: 天寧寺が遣明船の宿泊所となる

享徳2年 1453 : 天竜寺船団に尾道船籍の船が加わる

享徳3年 1454 : 天竜寺船団に尾道「住吉丸」(700石)あり

: 院島「熊野丸」(600石)が渡唐船団に加わる

応仁2年 1468 : 正使清啓等が尾道へ寄港し、中国地方4ヶ国より赤銅を積む

天文23年 1554 : 小早川隆景が宇賀島の海賊を攻め滅ぼす

安土桃山

- 天正 18 年 1590 : 渋谷与右衛門(大西屋)が毛利軍の軍需品を輸送
文禄元年 1592 : 豊臣秀吉が尾道に継ぎ船を置く
 : 大西屋渋谷氏が毛利軍のその他の軍需品を輸送

江戸

- 延宝元年 1673 頃 : 北前船の入港で港を中心とした商業が盛んになる
元禄 5 年 1692 : 棕浦廻船 2 艘、尾道廻船 1 艘が年貢米を大坂へ輸送
享保 6 年 1721 : 棕浦廻船中が棕浦金蔵寺観音堂を建立
享保 12 年 1727 : 尾道町人、大坂登せ米請け合い積みを廃し、蔵方より直接回船する
元文 5 年 1740 : 広島藩士・平山角左衛門尚住が尾道町奉行に任命される
寛保元年 1741 : 平山奉行が住吉浜の埋め立てに着手
天明 7 年 1787 : 尾道に米船入港せず食糧不足。米の港外積出を禁ず
寛政～文化期 1789～1817 : この頃、兼吉渡し(後の公営渡船、尾道渡船)が開設される

※向島より尾道船渡しの触書

- 寛政 3 年 1791 : 向島西村船床改
文化 2 年 1805 : 棕浦廻船中が棕浦港に金毘羅大権現常夜燈を建立
文政 2 年 1819 : 林屋竹内要助(隼太)が尾道一大坂間に定期船便を開く
文政 4 年 1821 : 棕浦廻船中が大坂住吉大社に永代常夜燈を寄進
文政 8 年 1825 : 尾崎町浄土寺下から向島東村一本松間の渡船の許可が下りる(ドック渡し)
文政 9 年 1826 : 棕浦、三庄村両浦廻船定書で、船持中が協約
天保 6 年 1835 : 当年寄進の棕浦良神社玉垣に 27 隻の船名あり
弘化 2 年 1845 : この頃、棕浦千石船廻船が姿を消す
弘化 4 年 1847 : 問屋連中が港内をさらえる
嘉永 5 年 1852 : 向島西村船床改
嘉永 7 年 1854 : 向島東村、向島西村、岩子島村、立花村等の「御船手御役家」数を調査
文久 2 年 1862 : 向島東村船数改

明治

- 4 年 1871 : 浜問屋によって港の浚渫(シュヰツ)が行われる
7 年 1874 : 広島一大阪間の蒸気船の寄港が始まる
 : 竹内隼太が尾道一大阪間に蒸気船航路を開設
9 年 1876 : 松本栄七帆布製織を向島兼吉で始める

- 13年 1880 : 渡船営業人総代相方政助ら「渡船営業締合御届」を戸長吉原大作に提出(向島)
- 17年 1884 : 大阪商船会社の寄港地となる
- 20年 1887 : 御調, 世羅郡長の小島半七郎が尾道港の浚渫を促す激励文を尾道町民に送る
- 21年 1888 : 尾道港の浚渫が行われる
- 28年 1895 : 松本帆布工場設立(資本金50万円、兼吉)
- 30年 1897 : 尾道-今治航路開設
- 32年 1899 : 尾道港の浚渫工事終了
- 34年 1901 : 11年間に渡る尾道港の浚渫が再び始まる
: 因島三庄に備後船渠株式会社開設(翌35年工場竣工)
- 36年 1903 : 土生船渠合資会社が改組して因島船渠株式会社となる
- 37年 1904 : 岩崎乙吉尾道船渠造船所を向島西村に開設
: 機械船「生口丸」就航(瀬戸田)
- 41年 1908 : 因島船渠工場閉鎖
- 44年 1911 : 大阪鉄工所が因島船渠を買収して因島分工場を開設(翌45年より操業開始)

大 正

- 2年 1913 : 日立造船工場の前身となる水野ドック(水野船渠造船所、東村の水野常吉)設立
- 4年 1915 : 10年間に渡る尾道港内の浚渫荷上げ場の整備が始まる
: 山陽造船所設立(瀬戸田)
- 6年 1917 : 大阪鉄工所因島工場が備後船渠の経営に乗り出す
: 尾道船渠が株式会社に改組。尾道船渠の岡島地先海面埋立計画で向島西村の村政混乱が長期化(8年、計画を修正承認)
- 7年 1918 : 水野船渠を買収して向島船渠株式会社が向島東村に開設
- 7年 1918 ~ 8年 1919 頃 : 土生商船の前身となる弓場汽船創立
- 9年 1920 : 因島汽船株式会社設立(11年一時解散し、同名称で新会社設立)
- 10年 1921 : 豊田郡帆船同盟会結成
- 11年 1922 : 兼吉渡船組合成立し、発動機船も登場(岡田菊松ほか25名)
- 14年 1925 : 松本など帆布工場が廃業
: 瀬戸田汽船株式会社創立
- 15年 1926 : 大阪鉄工所因島工場が修理専門工場となる(新造船は桜島工場へと分課)
: 向島船渠が時計塔を設置

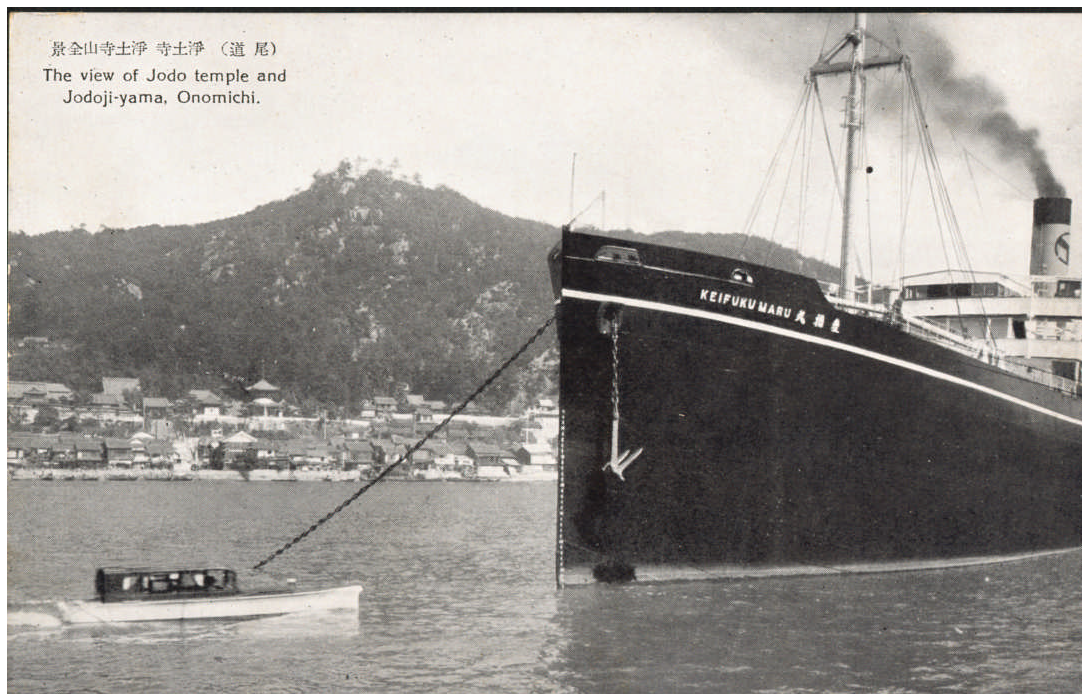
昭和

- 2年 1927 : 尾道港が第二種重要港湾となる
- 4年 1929 : 尾道港が開港場となる
: 大阪鉄工所因島工場が向島船渠の経営にも乗り出す
- 5年 1930 : 兼吉渡船場の県営化を村会で決議
: 発動機船および船具製造の須田鉄工所設立（向島）
- 8年 1933 : 小歌島灯台設置
- 15年 1940 : 向島船渠が尾道船渠敷地を買収し西工場建設
: 瀬戸田船渠株式会社創立
- 17年 1942 : 杉原造船鉄工所が株式会社日産造船所に合併
- 18年 1943 : 尾道造船所設立
: 大阪鉄工所因島工場が日立造船に移る（日立造船因島工場、向島船渠吸収合併）
- 19年 1944 : 日立造船など15社が軍需会社第一次指定を受ける
: 瀬戸田造船株式会社設立
- 21年 1946 : 尾道海底電線事務所設立
- 23年 1948 : 尾道海上保安署設立
: 尾道港が国の特定港となる
- 25年 1950 : 日産造船鉄工所倒産、杉原造船所として再建
: 尾道向島渡船組合発足
: 輸出タンカーブームで日立造船向島工場活況
- 26年 1951 : 公営尾道向島渡船事業組合（公営渡船組合）創設
- 27年 1952 : 弓場汽船から土生商船へ改称
- 28年 1953 : 兼吉渡しが公営渡船となり、フェリーボートが使われ始める
: 杉原造船所を向島船渠株式会社に改組
: 造船不況で日立造船向島工場不振、向島町議会が計画造船実施を嘆願
- 30年 1955 : 尾道港が農林省から木材輸入港の指定を受ける
- 31年 1956 : 高根渡船町営に移管（瀬戸田）
- 33年 1958 : 駅前旅客待合所完成
- 35年 1960 : 公営渡船に鋼鉄船の第八公営丸登場、カーフェリー化が進む
- 36年 1961 : 瀬戸田海事工業株式会社設立
- 37年 1962 : 三原行きフェリー就航（瀬戸田）
- 38年 1963 : 尾道－今治間に水中翼船就航
- 39年 1964 : 水中翼船就航（瀬戸田）

- 42年 1967 : 瀬戸田造船、日立造船系列下に入る
 47年 1972 : 内海造船株式会社発足
 50年 1975 : 瀬戸田一三原間高速船就航
 51年 1976 : 日立造船向島工場が新造船工事を停止
 59年 1984 : 公営渡船が廃航し組合解散。尾道渡船（株）に民営化

平成

- 9年 1997 : 新尾道大橋開通（平成 11）に伴う尾道港内渡船航路再編により、玉里渡船が
 廃航
 13年 2001 : 上記航路再編により、有井渡船が廃航
 20年 2008 : 岸本渡船（彦ノ上渡し）が廃航



絵葉書 日立造船東工場停泊の慶福丸（対岸に浄土寺が見える）

写真提供：尾道学研究会デジタル・アーカイブス